
再生。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再生。

【Zコード】

N2461M

【作者名】

はなぢょ

【あらすじ】

白井咲が重い足取りで向かった先は「再生屋」
いま、不思議な扉が開く

真つ赤に燃える炎。

辺りは一面、赤い海。

その海の向こうから聞こえる声。

「お姉ちゃん」

「郁！」

私はそう言つてガバッと飛び起きた。

額に手を当て、長い溜息をつく。

「・・・・・夢」

それだけ呟いてベッドからのろのろと這い出た。

カーテンの向こうから太陽の日差しが差し込んでいた。

『昨夜未明、 県 市の林の中で女性の遺体が発見されました。

女性は』

私はぼんやりとテレビのニュースを眺めていた。
コーヒーの入ったマグカップをテーブルに置いた。
一口だけ飲んで、立ち上がる。

テレビの置かれた棚の引き出しの前に移動して引き出しを開けた。
中に入っているペンダントをそつと取り出した。
ちょうど鎖に髪の毛が絡んでいる。
長いパーマのかかつた髪。

「お姉ちゃん。このペンダントあげる」
そう言つて笑う郁の笑顔が浮かんだ。
私はペンドントをギュッと握った。
「・・・・・大丈夫。必ず・・・・・」
そう呟いてペンドントをカバンにしました。

素早く着替えを済ませてコーヒーを一気に胃に流し込んだ。
アパートを出ると空を見上げた。

雲一つない青空。

私は顔を真っ直ぐに向けて足早に歩き出した。

「確かにこの辺だつたよね・・・・・・」

私はそう言つて小さなビルを見上げた。

五階建ての古いビル。

ここ四階が目的の場所。

エレベーターで四階へいくと。

目の前にあつたのは何も書かれていない真っ白な看板と頑丈そうな扉。

インターホンが見当たらない。

扉をノックしてみる。

もう一度ノックしてみる。

やはり反応がない。

ふと扉についた取つ手に手をかけてみた。

ギイ。

重い扉は簡単に開いた。

扉を開けると目の前に誰か立っていた。

私は驚いて逃げ腰になつた。

目の前に立つていたのは男性。

「何か御用でしううか」

私と同じ二四、五歳くらいの若い人だつた。

ゴクン、と唾を飲み込んで、私はこう尋ねた。

「あの・・・・ここつて再生屋さんですよね？」

男性は黙つたまま私を見つめた。

そして、くるりと向きを変えて私に背を向けてこう言つた。

「上がつてください」

モノトーンのシンプルな部屋に通された。

「おかげください」

男性に促されて私は椅子に座った。

向かい側に男性が腰をおろすと、彼は言つた。

「黒崎です」

「白井と申します」

私はそう言つとカバンを開けた。

カバンの中からペンドントを取り出した。

「このペンドントの鎖にからまっているのが妹の郁の髪の毛です」

黒崎さんはペンドントを手にとり、からまつた髪の毛を眺めた。

そして、それをテーブルの上に置き、立ち上がった。

「とりあえず、お茶を入れてきます。コーヒーでよろしいですか？」

「あ、はい」

黒崎さんは私がそう答えると奥にあるキッチンへ行つた。

「」の部屋もどう見てもリビングだ。

「・・・・・・本當なのかな・・・・・・」

私は黒崎さんに聞こえないように呟いた。

不安な気持ちが胸に広がる。

「髪の毛をもつてきたといふことは、私が何ができるのか大体は把握されているのですね？」

ゆつたりとした口調で黒崎さんが尋ねる。

「はい」

私はそう言つた後、テーブルに置かれたコーヒーに視線を落として、そして続けた。

「死んだ人間を生き返らせることができるんですね？」

黒崎さんは「コーヒーを一口飲んでから言つた。

「・・・・・・」のことは誰に聞いたのです？」

「妹から聞いたことがあるんです。妹は、ただの噂だと言つてしましましたが・・・・・・」

「でも貴方は信じたということですか？」

「信じたといふか

私は府へた。

「生き返らせたい人の髪の毛。必要なものはあと一つ」

黒崎さんはペンダントに視線をやりながら言った。

「あいつ？」

思わず聞き返す。

「妹さんと似た背格好の女性の髪の毛が一本だけ必要です」

…

料金は妹さんが無事、生き返った後でかまいません

黒崎さんばかりでないことを飲んだ。

五
行
一
か
さ
い

和の三葉は黒崎の人に和を見る

朱一以一歸宿的圖書 · · · · ·

「できれば年齢相近をつながるといいですね」

アリスが笑って、それも、甘美な女性の笑い

3

ね

「その女性はもしかして妹の代わりに・・・・・」

私はそこまで書かなかった。

背筋がゾクッとした。

「私が代わりに女性の髪の毛を用意してもらいましょうか。姉である貴方が用意したほうが成功率はグッと高まります」

黒崎さんはそう言つてまたコーヒーを飲んだ。

私が黙つていると、黒崎さんは付け加えた。

「相手の、髪の毛をもらう人の体を絶対に傷つけてはいけません。殺すなんてもつてのほか。髪の毛を一本もらうだけでいいんです。それだけは必ず守つてください」

私はフラフラと歩き出した。
黒崎さんは「髪の毛を手に入れたら、また来てください」と言つた。

髪の毛一本。

それだけなら、なんとかなるだろう。
郁の友人だつた子に郁と背格好が似た子がいるかもしれない。
でも。

髪の毛だけで、生き返ることができるのだろうか?
きっと、私が髪の毛を持っていた相手の命が・・・・・。

私は近くにあつた公園のベンチに腰をおろした。
平日の午前中なので公園には誰もいなくて静かだつた。
背もたれに体を預けて大きな溜息をつく。

『咲ちゃん、見てて』

男の子はそう言つと、死んでいた小鳥に掌をかざした。
次の瞬間。

小鳥は起き上がり、元気に空へと羽ばたいていった。
男の子は嬉しそうに小鳥が飛び立つた空を見ていた。
それは。

幼い頃の記憶。

よく一緒に遊んでいた聖人君が小鳥を生き返らせた時のこと。
今でも鮮明に覚えている。

もしかしたら。

小鳥は本当は生きていたのかもしれない。
何か仕掛けがあつたのかもしれない。

でも。

郁から「再生屋」の話を聞き、幼い頃のことを思い出した。
もしかしたら、つて。

あれは種も仕掛けもない、何か不思議な力だつたんじゃないかなって。

聖人君の顔はもう思い出せないが
黒崎という苗字ではない。

聖人君の苗字は確か、安藤だった。
だから、別人だったのだが。

そんな不思議な力を持った人間が本当にいるとしたら。
黒崎さんも聖人君と同じ力を持っているかもしれない
そう考えたのだ。

私は騙されているのかもしれない。

そんなことができるはずがない、そう思うのが普通だが、私はた
つた一人の家族を亡くした。

可能性が○じゃない限り、私は彼信じてみたい。
でも。

まさか、生きている人間の髪の毛がいるなんて・・・・。
間接的に殺人を犯すようなものではないか。
そんなことはできない。

私は大きな溜息をついた。

足元に黄色のハンカチが落ちた。
私がそれを拾うと。

「ありがとうございます」

女の子がそう言ってハンカチを受け取つた。
どこか悲しそうな笑顔。

私は、その女の子を見て、ハツとした。
彼女は郁に背格好が似ていたのだ。

華奢な体。

年齢も一七歳から一八歳くらい。
郁と同じ歳かもしない。

「あの、隣に座つてもいいですか？」

女の子は私にそう尋ねた。

「あ、どうぞ」

私は少しだけ驚いて、頷く。

「ありがとう。死ぬ前に誰かと話したいなあと思つてたから……」

・・

彼女の言葉に私はさらに驚く。

「…………死ぬ前？」

彼女は少しの間、黙つてから。

ポツリとこう言った。

「自殺、しようと考えているの」

「…………自殺？！」

私は目を見開いて聞き返す。

彼女は黙つて頷いた。

肩まで伸びた綺麗な黒い髪が揺れた。

「私、朱里^{あかり}。貴方は？」

朱里ちゃんは少しだけ笑顔でそう言った。

「私は咲」

そう言つと、震える声で、朱里ちゃんに尋ねた。

「朱里ちゃん、貴方、何歳なの？」

「一八歳」

「…………郁と同じ歳だ。」

「なんで自殺なんか…………」

私の言葉に朱里ちゃんは言った。

「私、天涯孤独の身なの。お婆ちゃんがいたけど、お婆ちゃんも病氣で死んじゃって、三年前に私をひきとつてくれた叔父さんは私に暴力を振るつし……」

空を見上げたまま、朱里ちゃんが続ける。

「それだけでも嫌なのに、失恋しちゃうし、友達もいないし」

「そんな…………」

私はそこまで言つて言葉につまつた。

「この世にいたつて楽しくない、不幸なだけ。それなら死んで天国の家族と会いたい」

朱里ちゃんはそこまで言つと寂しそうに笑つた。

この子は死にたがつてゐる。

それなら。

髪の毛を一本もらつてもかまわないだらう。郁の代わりになつてもらつても大丈夫だらう。

私はそんな最悪なことを考えた。

そして。

こう口に出していた。

「とりあえず、私の家で話さない？」

「一人？」

部屋を見渡しながら朱里ちゃんが私にそう尋ねた。

私はマグカップを一つトレーに乗せて歩きながら言つた。

「そう。私もね、天涯孤独なのよ」

そう言いながらココアの入つたマグカップを朱里ちゃんに渡す。

「ありがとう。へえ。そつなんだ。同じなんだね」

「妹が一人、いたの」

朱里ちゃんがマグカップに口をつけたまま私を見る。

私はココアを一口飲んでから下を向いてこいつ付け加えた。

「一ヶ月前に死んじやつたんだ」

「・・・・・なんで？」

「家が火事になつて・・・・・・郁だけ逃げ遅れたの・・・・・・

私はそこまで言つと拳をギュッと握つた。

一ヶ月前の、あの日。

異変に気づいた私は夜中に目を覚ました。

すると。

辺りは黒い煙に覆われていた。
慌てて外へ逃げようとする。

郁の寝室が火の海になっていた。

「郁！」

私は叫んだ。

「お姉ちゃん」

郁の声が聞こえた。

それはいつもの郁の声。

「お姉ちゃん早く逃げて」

「逃げられるわけない」

私はそう言つて火の海へ近づいた。

でも、炎が壁になつて部屋へ入れない。

「おい、女の子がいるぞ！」

その声にハツとした。

消防士が私の元に走ってきた。

「妹がいるの！ この部屋に妹が！」

私の言葉に消防士は「後は私達に任せて」と言つて、私は外に出されてしまった。

結局。

郁は助け出されたものの、

既に息絶えていた。

「ごめん……………変なこと聞いちゃったね……………」

朱里ちゃんは、そう言つと涙を拭いた。

彼女の目からはポロポロと後から後から涙がこぼれた。

「ごめん、私が泣くなんて、おかしいよね」

朱里ちゃんはそう言つて涙を必死で拭いながら笑つた。

私は胸が痛んだ。

いくら彼女が死を願つてゐるからって、こんな純粹で優しい子を

郁の身代わりにはできない・・・・・。

私には、誰かを身代わりにまでして郁を生き返らせるなんてそんなことはできない・・・・・。

「・・・・・ 気分、変えようか」

私はそう言つとテレビをつけた。

『 昨夜、また若い女性が殺害されました』

テレビのニュースキャスターの言葉にふとテレビに向ひをやる。

『 女性は 市に住む一四歳の』

「 市って、すぐ近くじゃない。怖いね。連續殺人だつて」

私はそう言つてテレビから目を逸らした。

朱里ちゃんの目はまだ赤かつた。

しばらく朱里ちゃんは黙つていたが

私を見て、こう言つた。

「咲ちゃん。私のお姉ちゃんになつて」

「え?」

「ダメ?」

彼女の黒髪が揺れた。

「いいよ」

私はそう言つて微笑んだ。

そうだ。

この子と一緒にここで暮らそつ。

血は繋がつてなくても姉妹として、これから仲良くなれっこいつ。
・・・・・ 郁の代わりに。

「じゃあ。お姉ちゃんからのお願い」

私の言葉に朱里ちゃんが首を傾げる。

「もう自殺する、なんて言つちやダメよ」

「分かった」

朱里ちゃんはそう言つとニシ ハリ微笑んだ。

そして。

笑顔のまままで私に「いつ」言つた。

「じゃあ、私からもお願ひ」

「なあに？」

朱里ちゃんは笑顔を絶やさないまま、口を開いた。
「お姉ちゃんの髪の毛、一本ちょうどいい」

耳を疑つた。

私は黙つたまま朱里ちゃんを見つめた。

「一本でいいんだよ？」

「何に・・・・・使うの？」

「じゃあ聞くけど」

朱里ちゃんはそう言つと楽しそうに、まるで友達とたわいないお喋りでもするような口調で「いつ」言つた。

「お姉ちゃんは、なんで私を家に連れてきたの？」

「・・・・・それは」

「私が自殺したいって言つたから？だから、私を妹さんの身代わりにしようとしたんでしょ？自殺するなんなら、いいやつて思ったんでしょう」

私は何も言えなかつた。

「ほら。黙つてるのは肯定してると同じ」

朱里ちゃんはそう言つと、溜息をついてから、続けた。

「みーんなそう。あのビルから出てきた人は、私が自殺したいって言つた途端。私と仲良くしようとしてくる」

「・・・・・みんな？」

そう聞いた声が上ずつた。

朱里ちゃんは頷いた。

それきの一コースが耳の奥で再び再生させた。

市。

そういえば、再生屋があるのは 市だ。

そして私と同じ歳の女性が何人も　市で殺されている。
…………まさか。

「髪の毛…………あげない、って言つたら?」
私の言葉に朱里ちゃんは口の端を吊り上げて言つた。
「…………そしたらね」

ピーンポーン。

部屋にインターホンの音が響いた。
私は逃げるよう玄関に向かつた。
ドアを開けると。

「…………黒崎さん?」

目の前に立つていたのは黒崎さんだつた。

「失礼します」

黒崎さんはそう言つとさつと部屋に上がつてきた。
「ちよつ・・・・・・あの・・・・・・黒崎さん!」
まるで黒崎さんは私の声は聞こえていいかのようにスタスタと
歩き、朱里ちゃんの前で立ち止まる。

「黒崎さん。早かつたね」

朱里ちゃんは黒崎さんを見てそう言つた。

背筋が凍るような感覚。

この二人…………知り合いだつたの…………?
華奢な体の朱里ちゃんだけじゃあ人は殺すのは難しい。
でも。

黒崎さんがグルだとしたら…………。

その時だつた。

「連續殺人犯、捕まつたんだな」

黒崎さんの言葉に驚いてテレビを見た。

『　市で四人の女性を殺害した犯人が、さきほど逮捕されました』

画面に犯人の写真が映し出された。

黒崎さんでも朱里ちゃんでもない別人だった。

「タイミング悪いね。こういう事件が起きてる時だから依頼人を怖がらせちゃったかな」

朱里ちゃんがテレビから視線を外して言つ。

私は黒崎さんと朱里ちゃんを見て、こう言った。

「…………一体、どういうことなんですか？」

モノトーンの落ち着いたリビング。

私はその部屋の椅子に座つていた。

ここに来るのは今日で二度目だ。

向かい側には黒崎さんと朱里ちゃんが座つている。

「朱里は私の助手です。私の依頼人に近づいてもらつて、彼女の髪の毛を依頼人が奪うかどうか見てもらつています」

「でも・・・・・もし私が兄を亡くした、と言つたら、どうするんですか？　亡くなつた人と同じ性別の背格好の似た人の髪の毛じやないとダメなんですね」

「もし貴方が再生させたい方が兄だと言つたら「誰でもいいから生きている人間の髪の毛を持つてきてほしい」と言つたでしょう」

黒崎さんの言葉に私は驚いて、こう尋ねた。

「…………どういうことですか？」

「他の人の髪の毛なんていらない、ってこと」

朱里ちゃんが代わりに答えた。

「え？！」

「そうです。髪の毛は亡くなつた方のものがあればいいんです。それで充分なんです」

黒崎さんはそう言つて私を見た。

「じゃあ、なんで他の人の髪の毛がいるなんて・・・・・・」

「失礼ですが、貴方を試したんです。貴方が本当に朱里の髪の毛を

持つてきたり私は貴方からの依頼を断りました

「どうして？」

「（）へ来る人は大抵、自分が生き返らせてほしい人物の代わりになる人間がいる、という知識を持つてくるんです。まあ、それは間違っているんですが」

「そうなんですか」

「なので、髪の毛を私に持つて来た人は平氣で人の命を奪える人だと判断して依頼を断ります。いい判断、材料なんですよ。人となりを見るための」

「黒崎さんのポリシーなのよね。誰の依頼も受けるわけじゃないの」

朱里ちゃんはそう言つて笑つた。

黒崎さんも少しだけ微笑んだ。

ああ。

そうだ。

思い出した。

幼い頃、聖人君が言つた言葉。

「では。約束通り、貴方の妹さんを生き返らせます」

黒崎さんの言葉に。

私は首を横に振つて言つた。

「…………もう、いいんです」

「え？」

黒崎さんと朱里ちゃんが同時にそう言つた。

「いいんです。郁は天国で幸せに暮らしているんだと思います」

私はそう言つて黒崎さんのいれたコーヒーを飲んだ。

苦味が口の中に広がる。

そう。

これでいい。

「でも、一つだけお願ひがあるんです」

私の言葉に黒崎さんと朱里ちゃんがこちらを見る。

「私もここに黒崎さんのお手伝いをさせてもらえないませんか？」

「わ！ 安藤さん、お手伝いしてもらおうよー。」

朱里ちゃんはそう言つと慌てて自分の手で口を塞いだ。

私は驚いて黒崎さんを見た。

「…………安藤？」

「黒崎つてのは、仕事上の名前です。」

「安藤…………聖人君？」

私の言葉に黒崎さん…………いや安藤さんが驚いた顔をした。

そして、少しだけ笑つた。

前髪の隙間から優しそうな瞳が見えた。

あの日。

彼は飛び立つ小鳥が見えなくなつても空を見ていた。
そして、空を見たまま、こう言つた。

「僕はきっと間違つてることをしてるんだ。でも、どうしても困つ
ている人にだけは、この力を使ってあげたい」

そう言つた聖人君がキラキラと輝いて見えた。

「あ、黒崎さん。お客様でーす」

朱里ちゃんの声に私は急いでキッチンへ向かつた。

「じゃ。私は寝室にいるね」

朱里ちゃんは私にそう言つと寝室に入つていった。

私は三人分のコーヒーをいれた。

「さて。仕事、仕事」

そう言つた黒崎さんの目は真剣そのものだった。

「やっぱり前髪、短い方がいいですよ」

私の言葉に黒崎さんは照れくさそうに笑つた。

トレーにコーヒーカップを三つ置いてリビングの方へ移動した。

中年の男性が椅子に座つてゐるのが見えた。

私の胸のペンドントが揺れる。
郁の宝物だつたペンドント。
郁は私の胸の中で優しく微笑んでいる。
永遠に。

(おわり)

(後書き)

読んでくれてありがとうございました。

これは1～2年ほど前に書いたものです。
最初は「再生屋」側を悪にして主人公が殺された、というバッドエンドにしようと
思つたんですが、書いている内にそれなりにハッピーエンドになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2461m/>

再生。

2010年10月8日14時32分発行